

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13077

研究課題名（和文）タンデム学習を取り入れた日本語教員養成プログラムの開発

研究課題名（英文）Implementing Tandem Learning in Japanese Language Teacher Training Program

研究代表者

末繁 美和（Sueshige, Miwa）

岡山大学・教育推進機構・准教授

研究者番号：60638998

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、タンデム学習を取り入れた日本語教員養成プログラムのデザインを構築することを目的としたものである。具体的には、(1) 日本語教育人材に求められる資質・技能の習得における課題の検討、(2) 日本語教育人材としての資質・技能習得のためのタンデム学習のデザイン構築、(3) 日本語教員養成課程履修生を対象としたタンデム学習の実践・効果測定を行った。外国語相互作用分析システムを用いた日本語授業分析により、タンデム学習が、日本語教員養成課程履修生の日本語授業に与える影響について検討した結果、タンデムを経験することで教室内のインターアクション増加に繋がる教授行動が促進される可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

タンデム学習に関する研究においては、これまで「互恵性」「学習者オートノミー」に関する研究が中心であったが、本研究において、教授者と学習者、双方の立場を経験することができるというタンデムの特徴に着目し、日本語教育人材に求められる資質・能力の習得に部分的に有効であることを示したことは、学術的意義があると考えられる。また、日本語教員養成課程履修生を対象としたタンデムを組み込んだ新たな養成プログラムの実践およびその効果を示したことは、実践力のある日本語教育人材の育成が急務となっている現状を踏まえると、社会的な意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to design a Japanese language teacher training program that incorporates tandem learning. Specifically, (1) examined issues in the acquisition of qualities and skills required of Japanese language teachers, (2) designed a tandem learning program to facilitate the acquisition of these qualities and skills, and (3) the practice and measurement of effectiveness of tandem learning between Japanese students in a Japanese language teacher training program and Japanese learners. The results of an analysis of Japanese language classes using FLint System showed that tandem learning may promote teaching behavior that leads to increased interaction in the classroom.

研究分野：第二言語習得

キーワード：タンデム学習 日本語教員養成 日本語教育人材に求められる資質・能力 外国語相互作用分析システム 授業分析

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本語教師の養成については、2000年の「日本語教員の養成について」に基づき、大学や民間の養成講座等で、教員養成が行われてきた。しかしながら、18年が経過し、「生活者としての外国人」が増加する等の時代の変化への対応に迫られ、2016年から文化審議会国語分科会に設置された日本語教育小委員会にて見直しが行われ、2018年に「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」が取りまとめられた。その中では、日本語教師を(1)養成、(2)初任、(3)中堅の3段階に分け、そのうち(1)養成段階においては、表1に示す「知識」「技能」「態度」に関わる資質・能力の育成が求められている。

表1 「日本語教育人材に求められる資質・能力の整理案」

(第2回日本語小委員会資料から抜粋)

知識	技能	態度
1. 言語や文化に関する知識	1. 教育実践のためのスキル	1. 言語教育者としての態度
2. 日本語の教授に関する知識	2. 学習者の学ぶ力を促進するスキル	2. 学習者に対する態度
3. 日本語教育の背景をなす事項に関する知識	3. 社会とつながる力を育てるスキル	3. 社会に対する態度

表1に示されるように、知識だけではなく、多様な学習者の背景を考慮し、ニーズに合った日本語教育ができる、より実践的なスキルを持った人材が求められていると言えよう。しかしながら、日本語教員養成課程における科目において、実際に日本語学習者と接したり、教えたりできる実践に関わる科目は「教育実習」に限られているのが現状である。特に、表1の「技能」における「2. 学習者の学ぶ力を促進するスキル」(日本語を分かりやすくコントロールする力)と、「態度」における「2. 学習者に対する態度」(相互尊重を前提とし学習者の背景や現状を理解しようとする態度)は、関連科目を履修して勉強したからといって、一朝一夕に身に付くものではなく、日常的に文化的背景の異なる人と接することで段階的に習得されていくものであると考えられる。また、日本語母語話者の場合には、意識的に母語を学習した経験がないことから、学習者の習得の困難点や心理が理解しにくいという問題もある。そこで、現在の日本語教員養成プログラムが抱える上記の問題を解決するべく、本研究では、定期的に日本語学習者とのやり取りが可能であり、教授者と学習者、双方の立場を経験することができるタンデム学習に着目した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、実践力を身につけた日本語教育人材育成を目標とした日本語学習者とのタンデム学習を取り入れた教員養成プログラムを構築することである。外国人労働者の受け入れ拡大を背景に、日本語教師の公的資格創設の方針が打ち立てられ、実践力のある日本語教育人材の育成が急務となっている。しかしながら、教育実習の内容が機関・団体により異なることや、国際社会や学習者の背景に対する理解や国際感覚が現在の養成研修に十分に含まれていないことなど、日本語教員養成における問題点が指摘されている(文化審議会国語分科会, 2018)。そこで、本研究では、日本語教育人材に求められる資質・能力の養成を目的とした、「互恵性」および「学習者オートノミー」を原則とするタンデム学習を取り入れた日本語教員養成プログラムの開発を行う。

3. 研究の方法

本研究は、タンデム学習を取り入れた日本語教員養成プログラムのデザイン構築を目指し、具体的には以下の3点について検討を行った。

(1) 日本語教育人材に求められる資質・技能の習得における課題の検討

文献研究を行い、日本語教育人材に求められる資質・技能について整理した。また、現行の日本語教育実習において、これらの資質・技能の習得においてどのような課題があるかを、教育実習生の実習後の振り返りレポートの分析を通して検討した。

(2) 日本語教育人材としての資質・技能習得のためのタンデム学習のデザイン構築

タンデム学習に関する文献研究を行い、タンデム学習の効果について整理し、(1)で示された現行の日本語教育実習において習得が困難な資質・技能との関連性について検討を行った。また、タンデムにおけるタスクデザインに関する研究成果を分析し、Akiyama(2015)で挙げられているタンデム学習の効果を最大限にするために考慮すべき10項目(目標設定、タスク、パートナー選択、教師の介入など)を考慮した上で、資質・技能の習得を最大化するための効果的なタンデム学習のデザインの構築を試みた。

(3) タンデム学習の実践・効果測定

タンデム学習が、日本語教員養成課程履修生の日本語授業における教授行動にどのような影響を及ぼすのかを検討した。具体的には、日本語教員養成課程履修生と日本語学習者をマッチングし、(2)で構築したタンデム学習を約1か月間実施し、タンデム前と後に、日本語授業を行った。外国語相互作用分析システムによる事前・事後の授業分析(Moskowitz 1971, 1976)、インタビュー、毎回の学習後に提出する感想、タンデム学習中の録音データの文字起こしの分析を行い、(2)でデザインしたタンデム学習の効果測定を行った。

4. 研究成果

(1) オンラインによる教育実習における実習生の学びおよび問題点の分析

現行の日本語教育実習において、日本語教育人材に求められる資質・技能の習得に関してどのような課題があるかを検討するため、2020年度にオンラインで実施した教育実習における実習生の振り返りレポートの分析を行った。当初対面での教育実習を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、オンラインでの実施となった。分析の結果、授業・教材作りに関する技術、状況・相手に応じたやり取りの技術、学習者の視点・背景の理解、言語教育者としての態度、精神面のセルフコントロールの5つのカテゴリーに関する気づき・学びならびに実施上の問題が観察されることが分かった。授業の導入・練習内容の不自然さや指示・説明の分かりにくさといった教授技術に問題を感じている実習生が多く、大人数のオンライン実習においては、対面に比べ、視覚情報から学習者の様子を把握し、即座に臨機応変に対応することがより難しい状況にあるという実施上の問題が示された。特に、日本語教育人材に求められる資質・技能のうち、「2.学習者の学ぶ力を促進するスキル」(学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする力)のように、相手や状況に合わせて、その場で柔軟に対応することが求められる技能については、教壇実習前に実施する数回の模擬授業では身に付けることが難しく、事前に入念に準備をしていたとしても対応に限界があることが分かった。以上の分析結果については、2022年に論文にまとめ公開した。

(2) タスクベースの言語指導(TBLT)の枠組みを用いたタンデムの構築

タンデム学習の主な効果としては、第二言語能力の向上、モチベーションの向上、異文化能力の向上、学習者オートノミーの発達が挙げられている(Bower, 2007)。その中でも、互惠性と学習者オートノミーの関係性を分析した脇坂(2012)では、「相手の学習をサポートする責任感」が高められ、やり取りを行う際に、相手が分かりやすいように話すスピードを調整したり、意識的に訂正を行う等、相手への配慮が行われていたことを報告している。言語的、会話的調整および訂正フィードバックは、言語教師に求められる重要なスキルであり、現行の教育実習において短期間で養成が難しい「2.学習者の学ぶ力を促進するスキル」(学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする力)とも関連する。

タンデム学習は、助け合って学ぶ「学び合い」志向の特徴を有するため(小林, 2016)、共通のゴールを目指しパートナーとやり取りを行うタスクが使用されることが多く、用いられるタスクの種類や配列等により、言語的、会話的調整および訂正フィードバックの出現数や種類が変わってくると言える。しかしながら、どのようなタスクデザインがタンデムにおいて効果的であるのかや、タスク遂行過程における学習者のふるまいがどのようなものであるかについては、まだ十分明らかにされていない。そこで、タスクベースの言語指導(TBLT)に基づいた日本語教材を用いたEタンデムの実践を行い、Eタンデム中の録音および学習日記を分析対象とし、マイクロ評価(Ellis, 2018)を用い、日本語学習者はタスクを達成できていたか、タスクに対する日本語学習者のふるまいは想定に沿うものであったかについて検討を行った。分析の結果、タスクの達成度については、時間の関係でタスク自体ができなかったものを除き、全て達成できていた。タスク中の学習者のふるまいについて、マイクロ評価の「反応」に基づく評価を用いて分析したところ、プレ・メイン・ポストタスクについては、日本人学生が主導する形で、TBLTの流れに沿う、想定した手順でタスクが進められている様子が観察された。一方で、タスク達成に向けての日本語学習者からの自発的な質問が少なく、特に意思決定タスクや話題知悉度が低いタスクにおいては日本語学習者の貢献度が低いことが分かった。また言語形式への焦点化が不十分であり、メインタスクにおいて観察された誤りやブレイクダウンが、ポストタスクにおいて繰り返される事例が見受けられた。このことから、タスクが達成されていたとしても、ピア学習の結果によるものであるとは言えないケースがあるため、日本語学習者のタスク遂行中の能動的な参加を促し、タスク達成における貢献度を高めるタスクデザインが求められることが示唆された。本実践と分析結果については、2023年に学会発表を行った。

(3) タンデム学習が日本語教員養成課程履修生の教授行動に及ぼす影響の検討

(2)で構築したタンデム学習を経験することにより、日本語教員養成課程履修生の日本語授業における教授行動にどのような影響を及ぼすのかを検討した。外国語相互作用分析システムを用いた分析の結果、日本人学生の平均発話数が学習者より多いこと、日本人学生の発話における直接的行動の平均値が間接的行動の約2倍であることが示された。また、この教師主導の傾向はタンデムを経ても変化がなく、Pica(1987)が指摘する教室における教師と学習者という不平等な関係性の影響が観察された。一方で、Eタンデムでの学びを意識的に取り入れた

と回答した日本人学生2名は、間接的行動の下位項目である「賞賛, 勇気づけ」および「質問」の数値がタンデム後に顕著に増えており、学習者の参加や発話を促す行動が積極的にとられていた。このことから、E タンデムを経ることで、部分的にはあるが、教室内のインターアクション増加に繋がる教授行動が促進される可能性が示された。本実践の研究成果については、2023年に学会発表を行い、2024年に論文として公開した。

以上のことから、E タンデムが日本語教育人材としての資質・技能の養成において一定の効果を持つ可能性が示されたが、E タンデム中に会得した教授スキルの詳細や、日本語教員養成課程履修生の教授観の変容のプロセスについては本研究では明らかにできなかったため、今後更に実践を重ね、検討したいと考える。

<引用文献>

- 小林浩明 (2016) 「タンデム学習の意義と可能性」『北九州市立大学国際論集』14, pp.135-145.
文化審議会国語分科会 (2018) 「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」.
脇坂 真彩子 (2012) 「対面式タンデム学習の互恵性が学習者オートノミーを高めるプロセス: 日本語学習者と英語学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』24, pp.75-102.
Akiyama(2015) Review of issues and potential solutions of Japan-US telecollaboration: From the program coordinator's viewpoint. 『ICU日本語教育研究』11, pp.3-13.
Bower, J. (2007). Negotiation of meaning and motivation in tandem language learning via text-based synchronous computer mediated communication. *Studies in Linguistics and Language Teaching*, 18, pp.31-53.
Ellis. R. (2018) *Reflections on Task-Based Language Teaching*. UK: Multilingual Matters.
Moskowitz, G. (1971). Interaction Analysis: A New Modern Language for Supervisors. *Foreign Language Annals*, 5(2), pp.211-221.
Moskowitz, G. (1976). The Classroom Interaction of Outstanding Foreign Language Teachers. *Foreign Language Annals*, 9(2), pp.135-157.
Pica, T. (1987). Second-Language Acquisition, Social Interaction, and the Classroom. *Applied Linguistics*, 8, pp.3-21.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 末繁 美和	4. 巻 12
2. 論文標題 日本語教育副専攻コースにおけるオンライン実習の試み 日本語教師に求められる資質・能力の養成を目指して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岡山大学教師教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 359～373
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/CTED/63319	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 末繁 美和	4. 巻 187
2. 論文標題 日本語教員養成課程履修生の E タンDEM前後の教授 行動の変容 外国語相互作用分析システムによる授業分析を通して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 末繁美和 日本語教育	6. 最初と最後の頁 243-250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 末繁美和
2. 発表標題 EタンDEMが日本語教育副専攻の学生の日本語教授に及ぼす影響 外国語相互作用分析システムによる授業分析を通して
3. 学会等名 2023年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 末繁美和
2. 発表標題 タスクベースの言語指導の枠組みを用いたEタンDEMの実践 - マイクロ評価における反応ベースの分析を通して -
3. 学会等名 第34回第二言語習得研究会（JASLA）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------